生活文化史 Seikatsu Bunkashi

＜史料館だより＞

目　次

◇本庄村長に三回就任した岡田善蔵 …… 大国正美　2
◇展示品との対話（十四）
　カキ氷機 …… 水口千里　4
◇図録『まちの歴史とくらし』の発行 …… 6
◇新着資料「はかる」 …… 6
◇トライやる・ウィークと史料館
　――本庄中学校の生徒を受け入れて―― …… 水口千里　7
◇史料館日誌抄 …… 道谷　卓　8

2006. 3 .31
NO.34

「摂津灘深江濱邊」（松永写真館発行、
大正時代末の深江浜の様子）▶
この写真は、本文P２の大国原稿に掲載されている岡田善蔵氏の孫・岡田堯至氏から借用したものです。
背景は大正末頃の深江浜にあった洋館と漁船。

神戸深江生活文化史料館

本庄村長に三回就任した岡田善蔵

史料館副館長　大国正美

岡田善蔵肖像

明治二十二年（一八八九）に深江・青木・西青木が合併して誕生した本庄村は、昭和二十五年（一九五〇）に神戸市に合併するまで六十一年の歴史がある。この間、十四代の村長を生んでいるが、この中で、唯一、四代、六代、八代の三回にわたって村長を務めた人物がいる。深江の岡田善蔵村長である。武庫郡郡会議員、郡会議長も歴任し地方政治一筋に生きた人物である。

岡田善蔵村長の経歴については、これまで、昭和十七年（一九四二）ごろから本庄村史の調査に当たった松田直一さんの手書きのノート（以下「松田ノート」と表記）しかなかった。筆写した史料だけに、どこまで正確なのか、判断に迷っていた。しかも岡田家の本家筋に当たる岡田茂義家は東京に転居され、史料も東京に移されたと聞いていただけに、地元には史料はないと思い込んでいた。

ところが、『本庄村史』の地理編・民俗編を刊行したことがきっかけになって、深江本町在住の善蔵の孫・岡田尭至さんが近世から近代にかけての岡田家の貴重な史料を保管していることが分かった。その中にあった岡田善蔵の履歴書と松田ノートを比較して、ノートの正確さが裏付けられた。歴代本庄村長については次に予定している『本庄村史』歴史編にも盛り込む予定だが、史料の残っている人物を中心に、この欄でも連載の形で紹介を続けたい。まずは地方政治一筋に生きた岡田善蔵の歩みから――。

岡田家は、江戸時代網屋という屋号を持ち庄屋役を務め、代々茂左衛門と称した。網元として漁業に携わる一方で、土地集積を進めた。岡田善蔵は、文久二年（一八六二）十一月五日、七代目岡田茂左衛門松蔵の五男として生まれた。幼いころ岡本村に養子に出るなどしたが、結局深江村に戻って分家を興し、南岡田家の祖となった。

善蔵は明治四十三年（一九一〇）に武庫郡水産組合が作られると副組合長や組長を歴任、漁場争いなどにしばしば仲裁に入った。大正十年（一九二一）に兵庫県水産組合連合会が法改正により改組された時、善蔵は武庫郡水産組合組長の職にあり、武庫郡水産組合と兵庫県水産組合連合会の両方から長年の功績を表彰されている（松田ノート四巻七十四ページ）。

◆四代・六代・八代の村長就任と功績

しかし、最も大きな足跡は地方政治への功績だろう。明治二十年（一八八七）数え二十六歳で深江村村議会議員に当選したのを皮切りに、表（次頁）のように議員を歴任。そして明治二十八年十二月、兄正蔵の後を受けて第四代村長に就任した。数え三十四歳の若さであった。

明治三十二年十二月に村長を満期退職するが、一年余り後の明治三十四年三月に六代村長に当選した。ただこのときは明治三十六年七月、任期途中で村長を辞任している。履歴書には「家事ノ都合ニヨリ」としか書かれていない。三度目は、明治四十年六月、第八代目村長に就任。実はこのとき郡会議員を兼務していたが九月に郡会議員の任期が満了。同四十四年に村長に再選され、大正二年（一九一三）六月「家事ノ都合ニヨリ」辞職するまで六年間村長を務めた。

篠田省著『自治団体の沿革』（東京都民新聞社、昭和五年）は、岡田善蔵を評して「温厚篤実人格高潔」としている。明治二十六年の旱魃で起きた芦屋川水車と東川用水に頼る本庄地区五ヵ村との訴訟で、善蔵は仲介を果たしており、その人柄が偲ばれる。この紛争の全容を示す史料はないが、訴訟は長期間にわたり郡政にも支障を来たし、当時の土橋多四郎郡長が調停を試みたが失敗。同二十七年十二月に郡長になった阿部光忠は、善蔵の力を借りてようやく円満解決させた。阿部郡長は、明治三十年九月「当時ノ状ヲ追想」、芦屋川水利功労として銀杯を贈っている（松田ノート四巻五十五ページ）。また明治二十九年御影町外八ヶ町村組合立菟原高等小学校の開校に協力、同三十二年三月、学校管理者でもあった阿部郡長は善蔵に銀杯を贈って感謝の意を表している（同五十九ページ）。

また第六代村長時代には、本庄村役場を新築した。明治三十五年一月の開庁式での善蔵の答辞によれば、村財政は不振だったが、それまでの庁舎は借家で、不便なうえ不経済なため、思い切って新築したという（同八十三ページ）。第八代のころは深江国道の改修に功績があり、村長退任後の大正三年十月、改修の功績により銀杯を贈られた（同百十一ページ）。

◆郡会議員との兼務

岡田善蔵は村長と同時に、あるいは交互に郡会議員も務めている。当時の郡会議員は、村長などとの兼務も可能で、明治二十三年の法律では任期六年。町村税の賦課される地価一万円以上の土地を持つ大地主選出議員と、町村会が選挙し町村から一人ずつ選出する町村選出議員があった。明治三十二年には大地主の特権を廃止、町村公民から選挙で選び、任期も四年に短縮、定員は二十六人とした。

岡田善蔵の最初の当選は、明治三十六年九月で地主選出議員が廃止された後であった。「家事ノ都合ニヨリ」第六代村長を辞職してから二ヵ月ほどしかたっていない。明治四十年六月に第八代村長に当選後、同年九月には郡会議員を満期退任するが、四年後の明治四十四年には、村長在職のまま御影町選挙区から当選。大正二年に町長を退任するまで郡会議員との兼任が続く。大正四年に本庄村選挙区から郡会議員に当選し、大正六年から一年間郡会議長。大正十二年に郡制が廃止されるまで郡会議員の地位にあった。引退後も深江区長などを務め津知川改修や深江の区画整理に尽力した（松田ノート四巻百十三ページ）。昭和十二年（一九三七）四月死去。数え七十六歳だった。地方自治に尽くした一生だった。

表・岡田善蔵の公職略歴

明治20年	1887	12月22日	深江村村会議員当選
21年	1888	2月18日	深江村外三ヶ村連合会議員当選
		3月29日	深江村総代当選
		5月25日	深江村外三ヶ村勧業会員当選
22年	1889	4月25日	本庄村村会議員当選
25年	1892	4月18日	本庄村村会議員選挙につき選挙掛選任
28年	1895	12月2日	本庄村第4代村長当選
32年	1899	12月9日	本庄村村長退職
34年	1901	3月24日	本庄村第6代村長当選
36年	1903	7月	家事の都合により本庄村村長辞任
		9月30日	武庫郡郡会議員当選
38年	1905	12月7日	武庫郡名誉職参事会員に補充
40年	1907	6月18日	本庄村第8代村長当選
		9月29日	武庫郡郡会議員満期退任
44年	1911	6月	本庄村村長再選
		9月30日	武庫郡郡会議員当選（御影町選挙区）
大正2年	1913	6月	家事の都合により本庄村村長辞任
4年	1915	9月30日	武庫郡郡会議員当選（本庄村選挙区）
6年	1917	1月	武庫郡郡会議長当選
		4月	本庄村村会議員当選
8年	1919	10月30日	武庫郡郡会議員当選（本庄村選挙区）
10年	1921	1月29日	武庫郡名誉職参事会員に補充（1年間）
		4月	本庄村村会議員当選
12年	1923	3月31日	郡制廃止により郡会議員失職

展示品との対話（一四）

カキ氷機

史料館研究員　水口千里

絶え間なくセミの声が続く昼下がり。ガラスの器に盛られた氷の山をアルミのスプーンで端からくずして食べる。カキ氷は、まさに夏の到来を感じさせてくれる食べ物のひとつである。史料館の季節展示「夏の風物詩」でも、食品サンプルのカキ氷が展示に彩りを添えている。そのカキ氷を作る用具が二点、史料館の収蔵資料に加わった。最近の夏祭りの夜店などで見かけるのは電動式だが、二点はともに手動式で鋳物製のがっしりとした作りである。

博物館施設では新たな資料を収集すると、写真撮影をして台帳カードを作成する。項目や様式は施設によって異なるが、資料の名称、材質、収集地名、収集年月日、製作方法、使用方法、資料の特徴など、要するに資料の身分証明書を作ると考えればよい。史料館でも早速台帳カードに記入をし始めた。ところが、ひとつ問題があった。

以前、このコーナーで使い方はわかるのに名称がわからない資料として「手洗いタンク」を紹介したことがある[1]。このカキ氷を作る用具もやはり正式名称がはっきりしないのだ。資料にはそれぞれ「日乃出」「ＫＩＲＩ」と商品名だと思われる文字が鋳出しされているものの、用具の名称は見当たらない。思いつくのは「氷削り機」「氷かき機」などだろうか。氷を小刀や鉋で削ることもあるので「氷削り機」が良いようにも思えるし、カキ氷を作るのだから「氷かき機」の方がわかりやすい気もする。「カキ氷」と「機」をキィワードにインターネット検索をおこなうと、メーカーのネットショッピングやレンタル用品がヒットする。それらのホームページには、「氷削機」「カキ氷製作機」「カキ氷機」「アイスライザー」などさまざま名称が使われている。

カキ氷機（日乃出）

カキ氷機（KIRI）

ここで、少し根本的な問題に立ち帰ってみよう。そもそもカキ氷の氷は、「削る」のか「掻く」のかどちらなのだろう。『広辞苑』で「かきごおり」を引いてみると、意外なことに「欠氷」という漢字が充てられていた。項目解説には、「①氷を欠きくだいたもの。ぶっかき。②こおりを削って雪状にしたものに、シロップなどをかけたもの。こおりみず。こおりすい。ゆき。」とある。「かく」は「欠く」なのかと意表をつかれた思いで、今度は「掻く」を引くと、項目解説⑦に「道具を動かして物の面を削る」とあり、用例として「氷を掻く」が挙げられている。「欠く」には、「削る」という意味も「氷」との関連を示す用例もないが、「欠く」の項目解説①「一部分をこわす」を読むと、子供の頃高熱を出すと、母がブロック状の氷をアイスピックで割って氷枕に入れてくれたのをふと思い出す。しかし、ここには明らかに語彙の混乱がある。一体なぜこんな混乱が起こったのだろうか。

『枕草子』では、「あてなるもの」つまり上品なものとして、氷を小刀で削った「削り氷（ひ）」に甘味をつけ、新しい金鋺（かなまり）に入れたものを挙げている。雪状に削った氷にシロップをかけて食べるカキ氷の原型がこの文から読み取れる。また、貴族たちは「氷水（ひみず）」と呼ばれる割った氷に水を入れたものも楽しんでいた。夏に氷を楽しむ文化は、氷室の存在とともに古代から伝えられてきた。しかし、一般庶民が、氷を簡単に入手できるようになるのは近代以降であった。

『明治事物起源』[2]からは、明治時代の庶民と氷との関わりが読み取れる。以下に、それをまとめてみた。

① 明治四年に始まった氷の輸入を契機に氷の需要が高まり、さまざまな地域から天然氷が取り寄せられるようになる。しかし、運搬中に溶けるなどの問題があり、充分な供給はかなわなかった。

② やがて、北海道に製氷場が作られ「函館氷」と呼ばれる氷が広く出回り、氷塊の小売が始まった。

③ 起源は諸説あるが、明治七、八年には「氷水（こおりすい・こおりみず）」と呼ばれる品を売る露店が増え、ガラスの盆に盛って出されていた。

④ 「氷水店」は、最初婦人や地位のある人が出入りするのははばかれる類の店であり、氷塊を買って帰って自宅で使うことが多かった。

⑤ 上記の「氷水」は、氷の塊を白い布でくるみ槌で打ち砕き、それを水割りにしたと言われている。『明治事物起源』が執筆された時期には、鉋で削るものが一般的だった。

⑥ 国内で本格的に人造氷製作がおこなわれだしたのは、明治二〇年以降である。

これらの情報を整理すると用語に混乱が生じた事情が少しずつわかってくる。元来氷の食べ方には、欠いて砕いた氷に水を入れたものと、削った氷という二種類があり、「氷水」「削り氷」というように呼び方も分かれていた。技術的には、氷を雪状に削るより、割る方が手軽だったはずだ。だから、明治の始めの「氷水」も「打ち砕いたもの」が主流だった。やがて、人造氷の誕生、保冷の技術や鉋など道具の発展に伴って、もっと舌触りのよい「氷を削って雪状にしたもの」に移行し今に至ったのだろう。そして、両方の意味を表す名称としてなぜか「カキ氷」が定着した。その齟齬が、今なお続く用語の混乱を招いたのではないだろうか。

結局、正式名称を特定できないまま、台帳カードには便宜上「カキ氷機」と記入した。「カキ氷」が一般的な名称であることを考慮すると理解を得やすいと判断したからである。こうした事態はめずらしいことではなく、博物館施設の情報交換のネットワーク構築を待望する瞬間でもある。

「身に染むや　夏の氷の　有難さ」

『明治事物起源』には、九代目団十郎が知人に送ったこんな句も紹介されている。明治初期、氷を求めて群がる人々を見て詠んだものだという。今では冷房装置や冷凍冷蔵庫が普及し、暑さをしのぐ術はいくらでもある。明治の人たちをそれほど魅了した氷に人が群がることはない。現代の若者たちが、砕いた氷が涼をとるのにどれほど役立つか身を以って知るのは、炎天下の甲子園で「かち割り氷」を手に応援する時かもしれない。

註(1) 水口千里「手洗いタンク――展示品との対話十――」『生活文化史――史料館だより』二八号　二〇〇一年三月三一日　神戸深江生活文化史料館

註(2) 石井研堂『明治事物起源』ちくま学芸文庫　一九九七年　筑摩書房

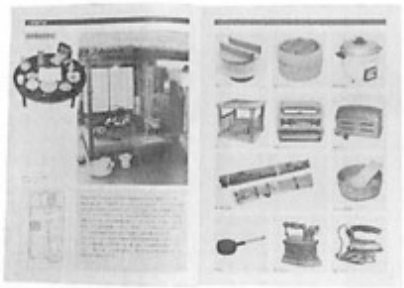
図録『まちの歴史とくらし』の発行

このたび、史料館の成り立ち、歴史、展示、活動など、史料館のすべてがわかる一冊として『まちの歴史とくらし』（平成17年3月30日発行）を刊行しました。

一九八一年に「神戸・深江会館生活文化史料室」として産声を上げた史料館は、翌々年には施設を拡充し「神戸深江生活文化史料館」と名を改め、地域に密着した博物館として地元の方々に育まれてきました。『本庄村史』編纂のために地元の協力のもとで収集された資料の公開に伴い、学校、学術団体、生涯教育機関などからの団体見学の受け入れ、各種講演会、研究会開催への協力と、活動の幅を拡げて今日に至っています。本書は、史料館の収蔵資料に加えて、活動の全容、周辺の史跡なども紹介しています。

A4版、全カラー32頁で、収蔵資料、懐かしい風景、史跡などの写真満載の冊子です。史料館で一冊三〇〇円で販売しています。

（文責・水口千里）



新着資料「はかる」

新着資料のうち、「はかる」ことにこだわった三点です。今後、「展示品との対話」のコーナーで紹介していきたいと思います。

台ばかり

台ばかり

手動計算機

トライやる・ウィークと史料館
――本庄中学校の生徒を受け入れて――

史料館研究員　水口千里

兵庫県では、中学生二年生を対象として、地域での体験を通して学ぶ「トライやる・ウィーク」を実施している。史料館では、毎年本庄中学校の二年生を受け入れており、本年度も六月九日、一〇日の二日間、宮本楠丸君が史料館で研究員としての業務を体験することになった。

九日は、史料館の図録『まちの歴史とくらし』と『史料館だより』三三号の発送作業をおこなった。冊子小包として郵送するので、最初に、史料館専用の封筒に、内容物がわかるように三角の切り込みを入れる。次に、封筒表面に冊子小包と料金後納のゴム印を押し、宛名シールを貼り、冊子と送付状を入れて封をする。最後に送付先リストとの点検を行い、郵便局まで運んでもらった。冊数が多くかなりの作業量だったが、自主的に休憩時間も削って熱心に取り組んでくれたので、予定時間内に作業を終えることができた。

一〇日の午前中は、史料館一階にある季節展示コーナーの展示替えの体験である。まず展示中の五月人形を梱包し収蔵庫に収納した。次に、次の季節展示「夏の風物詩」展示に使用する資料を収蔵庫から出し、テーマに即した展示レイアウトを検討した上で、実際に展示作業をおこなった。ガラス製の蠅取器、夏用のお櫃など宮本君が初めて目にするものや虫籠、虫捕り網、かき氷機などなじみのあるものなどから好きな資料を選んで展示してももらった。演出用品としてかき氷の食品サンプルも使用した。

午後は、資料に付ける札の作成をおこなった。札には、資料の収蔵番号を記入する。市販されている荷札には、通常荷物に留めるために針金が捻ってつけられているが、それをそのまま長期間使用すると錆が出て資料を痛める。まず針金を外し、代わりに麻紐など自然素材の紐をつける。非常に手際よく、一〇〇枚ほどの荷札を作成してくれた。

最後に二日間の作業について話し合いの時間を設けた。史料館の作業は多義に亘り、外部の人たちにはなかなかわかりづらい。宮本君も、初日はとまどいがあったためかやや緊張ぎみだったが、二日目になると史料館のスタッフとの会話も弾むようになり、リラックスして作業に従事できたようだった。

◀完成した季節展示「夏の風物詩」の前で、宮本楠丸君

発送作業をする宮本君▶

史料館日誌抄

史料館研究員　道谷　卓

平成十七年三月以降

〈平成十七年〉

3月13日　グループおお　（見学者　一四名）
3月27日　ボーイスカウト芦屋地区三団カブ隊（見学者　二一名）
6月9日　トライやるウイーク・本庄中学校2年生1名を受入れ、／10日　2日間にわたり史料館の業務を体験してもらう。
7月12日　東灘区役所新規採用職員研修（見学者　三二名）
7月30日　東灘区役所・わくわく親子歴史探検隊（見学者一七名）
9月26日　宝塚造形芸術大学　（見学者　一九名）
11月17日　夢野小学校　三年生（見学者　三二名）
12月3日　東灘区役所・てくてく東灘（見学者　一〇〇名）

〈平成十八年〉

1月13日　福池小学校　三年生（見学者　一一九名）
1月18日　西郷小学校　三年生（見学者　六七名）
本庄小学校　三年生（見学者　一一〇名）
1月19日　中央小学校　三年生（見学者　九一名）
1月20日　六甲アイランド小学校　三年生（見学者　一二八名）
1月23日　六甲小学校　三年生（見学者　五五名）
1月24日　東灘小学校　三年生（見学者　一一五名）
1月25日　なぎさ小学校　三年生（見学者　九九名）
1月26日　福住小学校　三年生（見学者　六九名）
1月27日　宮本小学校　三年生（見学者　二五名）
1月30日　魚崎小学校　三年生（見学者　二二〇名）
1月31日　和田岬小学校　三年生（見学者　四七名）
本山南小学校　三年生（見学者　九二名）
2月1日　本山第三小学校　三年生（見学者　一一四名）
2月2日　摩耶小学校　三年生（見学者　六二名）
2月6日　灘小学校　三年生（見学者　四六名）
2月7日　御影北小学校　三年生（見学者　一六一名）
2月10日　住吉小学校　三年生（見学者　一二四名）
2月14日　西灘小学校　三年生（見学者　六四名）
2月17日　御影小学校　三年生（見学者　九八名）

資料寄贈者ご芳名（敬称略・二〇〇五年四月）以降

〈坪内光重〉手動計算機／〈西垣良雄〉台ばかり（二点）

編集後記

最初の文章は村史の編纂過程で集められた資料をもとに岡田村長の足跡をまとめたものです。展示品との対話は、なつかしいカキ氷機を紹介してもらいました。

今年も恒例の小学校三年生の団体見学の受け入れを無事終えました。今年度は前年から3校減ったものの、見学者数は過去最多の一九三八名を数えました。（T・M）

『生活文化史』　第34号　06・3・31
編　集／道谷　卓
発　行／神戸深江生活文化史料館
〒658-0021　神戸市東灘区深江本町3-5-7
☎　078-453-4980（FAX兼用）